

# 福音時報

第138号 ★ 1964年6月

昭和39年5月25日 印刷 (定価20円)  
 昭和39年6月1日 発行  
 昭和28年3月18日 第三種郵便物認可 送料5部まで6円  
 編集・発行者 黒沢久男  
 印刷所 株式会社大澤印刷所  
 大阪市生野区東桃台3の18

発行所  
 大阪市阿倍野区帝塚山東1の16 (登録大阪12906番)  
 福音時報社

定価一部20円 (送料共312円・50部以上は1割引100部以上は2割引送料不取)

## 説 論

### 信徒大会、今後

蓮見和男

二年間祈り、準備しぬいた信徒大会は、すばらしい成果をもって終った。

この信徒大会が、参加した人びとにどれだけ感銘を与えたかは、全員にくばったアンケート、その後、ぞくぞく集っている感謝状、また各教会での話し合いの中に、はっきりと認められることができる。すでに多くの教会、中会で、信徒大会の今後の生し方について、さまざまな集会がもたれているとき。これは、これまでの現象ではなからうか。

そこで、信徒大会の成果をかえりみつつ、今後の課題について考えてみよう。

信徒大会の第一の成果は、ただ千名をこえる会衆が一堂に会したことではない。その会衆が一つ御言をきき、一つ御霊のみちびきを覚え、聖晩餐にあづかることによつて、一つからだにづらなる肢として、

の共同の意識を強く覚えたことである。このことは、単なる集団心理や感じの問題ではない。共通の主のみちびきををはっきりと覚え、告白することのできたことである。千にのぼる会衆の祈禱が、実にすべての行動が整然と行われたことも、まったくそれ以外

の理由を考へることができない。このことは出席した他派の人が舌をまき、かつ、うらやましがっておられた。

第二の成果は新しい小分団方式が生かされ、全員が話し合いに参加して、日基の再確認ができたことにも、課題が与えられたことではなからうか。

このことは、従来の修養会にはなかったことである。はでなことは何一つ行われなかったが、地味にしかも熱心に、真剣に討議を重ね、自分の教会の弱さを教えられ、ともに、また同苦の友を見出す

し励まされ新しい出発を誓った人が多かったのではなからうか。

第三に、本大会が名実ともに「信徒大会」といいうるものであったこと「教職と信徒とが協力して」という、最初からの願いは十分に生かされた。このことこそ、長老主義らしい歩み方なのである。信徒の発言も祈りも活潑だったし、信徒の司会ぶりも立派であった。しかも、とくに感心したことは、どの信徒も神学的に訓練されていることである。これでこそ、整然とした統一行動がとれたのである。

また、細い点ではいふことがあるが、大きな成果としては以上の三つにとどめるとして、今後の生かし方について考えてみよう。

まず、ほっておいても会自体の力によって生きてくること、第一に修養会のやり方が根本的に変わること、第二に出席した信徒が、それぞれの教会の中で新しい働きかけをなしてゆくであろうことである。しかし、ほっておいてはできないことがいくつもある。

第一に、この信徒大会に、壮年層の出席がかなりあったし、大会の中で非常によい働きをした。このさい、これまで見られなかった壮年の連合体をつくり、もっと対社会の問題とじっくり取り組む必要がある。第二に、ここで与えられた課題を各中会でまとめ、さらに日本基督教会全

体の五年、十年の青写真をつくってゆくべきではないか。第三に、これを機会に、信徒(教職を含めて)一人一人の姿勢が、これまでのよりも一そう、攻勢へと転じられなくてはならないのではないかと。今度の信徒大会全体をおいて、教会と礼拝中心の体制が、はっきりと確認され、いわば日基の基調が再確認されたといえる。これなしに、何事もはじまらない。しかし、「時代における教会の使命」という面はどうであったろうか。たしかに、いくつかの分科会で論じられた。しかし、それは、今度の大会の太い線となつてではなかった。これまで日本のキリスト教界の対社会的な問題の取り上げ方は、非教会であった。それゆえキリスト論的にはなかった。そのためか、実りがあまりなかった。このすばらしい教会観と教会訓練に立った日本基督教会がその基本線をくずさずに、時代の問題と取組んでゆく、その時こそ、日本基督教会は、偉大な前進をつづけることになるであろう。やがて、われわれは、対社会的な問題で一つの重大な決断を迫られる時がくるにちがいない。そしてそれは、かならずや「キリスト告白」という形でわれわれに迫ってくるに間違いない。その時こそ、この信徒大会の成果が真に偉大なものであったか、実りうすいものであったかがさばかれる時なのである。

(茅ヶ崎教会牧師)

一審院から世間がマッソということをしたいと思つて、人間は湯川秀樹博士ぐらいになると世界のため役に立つが、普通のサラリーマンで一生を終るのなら生きる意義がないと思つたからだ。これは最近身近かから起つた、運転手殺しの、高校三年生の捜査本部へ護送されてゆく車中の告白である。▼犯罪の実態は、具体的に計画されたものとは思われず、ただなにかをやってみたい、スリルを求めたいという気持ちから自動車強盗をやつてやろうという考えはあった。それが「理由なき殺人」となり、金銭をうばい、平気で学校に行つて、グループ活動にも参加しているのである。▼この事件を構成している原因を追究してみると、両親は不和のために別居している。成績がよくならず進学に悩んでいる。友情から疎外された姿が見られる。スリルを求めめる心。平凡な人生に見通しをつけている。罪意識がない。ノイローゼ気味等、多くの原因を拾いあげることが出来る。▼なお青少年の非行の原因を「警察の窓」から見るならば「少年の身体的成熟が高まったこと、慾望や衝動を適当に制御する少年の精神発達にこれに伴わない。戦後における価値体系が混乱したこと。子供を教育する能力ないし責任をもたない親が増加したこと。義務教育における問題。少年教育に対する社会の無責任。消費の増大。マスコミの影響等」列挙しつくすことが出来ない。▼しかしこれらを総合してみると、これは大人の責任である。われらの家庭の教育は今どうなっているであらうか。学校は？社会は？教会は今この青少年に対して如何なる責任を自覚し、これを負わんとしているのであらうか。青年の信徒大会を!!

## 時評

一審院から世間がマッソということをしたいと思つて、人間は湯川秀樹博士ぐらいになると世界のため役に立つが、普通のサラリーマンで一生を終るのなら生きる意義がないと思つたからだ。これは最近身近かから起つた、運転手殺しの、高校三年生の捜査本部へ護送されてゆく車中の告白である。▼犯罪の実態は、具体的に計画されたものとは思われず、ただなにかをやってみたい、スリルを求めたいという気持ちから自動車強盗をやつてやろうという考えはあった。それが「理由なき殺人」となり、金銭をうばい、平気で学校に行つて、グループ活動にも参加しているのである。▼この事件を構成している原因を追究してみると、両親は不和のために別居している。成績がよくならず進学に悩んでいる。友情から疎外された姿が見られる。スリルを求めめる心。平凡な人生に見通しをつけている。罪意識がない。ノイローゼ気味等、多くの原因を拾いあげることが出来る。▼なお青少年の非行の原因を「警察の窓」から見るならば「少年の身体的成熟が高まったこと、慾望や衝動を適当に制御する少年の精神発達にこれに伴わない。戦後における価値体系が混乱したこと。子供を教育する能力ないし責任をもたない親が増加したこと。義務教育における問題。少年教育に対する社会の無責任。消費の増大。マスコミの影響等」列挙しつくすことが出来ない。▼しかしこれらを総合してみると、これは大人の責任である。われらの家庭の教育は今どうなっているであらうか。学校は？社会は？教会は今この青少年に対して如何なる責任を自覚し、これを負わんとしているのであらうか。青年の信徒大会を!!

目次	論説	時評	聖書講話	随想	主題講演	協議会	見聞記	信徒大会	座談会	報	
	「信徒大会、今後」……………蓮見和男(1)		「問いたもうキリスト」……………林三喜雄(2)	「選ばれた神の民」……………竹内厚(3)	「信徒大会今後の課題」……………高杉喜一郎(3)	「時代における日本基督教会の使命」……………藤田治芳(4)	「総合討議」……………R・H生(5)	「信徒大会見聞記」……………H・K生(6)	「出席者の声」……………(7)	「信徒大会の楽屋裏」……………(8)	「大中会だより」……………(8)

編集後記

主題講演

時代における

日本基督教会の使命

藤田 治 芽

日本基督教会の使命を考えるに当って、日本基督教会とは如何なる教会であるのか、その志している点は何かなどを知って見たいと思う。

日本基督教会の憲法は「日本基督教会は公同教会に属する一団の教会である」と規定している。又日本基督教会信仰告白は「教会はキリストの体、神に召されたる世の聖徒の交わりにして、主の委託により、正しく御言を宣べ伝え

の日に備えつ、主の来り給うを待ち望む」と述べている。これらの点から私は日本基督教会がこの時代において負うべき使命とは即ち、どこまでもキリストの教会としてあり続けること、そのために努力することであると確信する者である。これは私がこゝで述べようとする結論である。又同時にこれは旧新約聖書を一貫している真理であると言える。即ち旧新約聖書においては「神の選び」の民として示されていると思う。

旧約聖書の中心課題が何であるかについて現在多少、見方の相異があると思われるけれども「わたしはあなたの主である」と言うことを主題とする考え、「神の契約」に中心があるとする者、又は「イスラエルと神の選び」に主題をおく者などが大体的見方であると思う。そうであるとするればこれらはいずれも「神の選び」を明にして

「見よ、天と、もろ／＼の天の天におよび地と、地にあるものとはみな、あなたの神、主のものである。そうであるのに、主はたゞあなたを先祖たちを喜び愛し、その後の子孫であるあなた方を万民のうちから選ばれた」(申命記一〇ノ四・一五)「しかし、わがしもべイスラエルよ、わたしの選んだヤコブ、わが友アブラハムの子孫よわたしは地の果から、あなたを連れて来、地のすみ／＼から、あなたを召して、あなたに言った。あなたは、わたしのしもべ、わたしはあなたを選んで捨てなかつた」(イザヤ書四一ノ八・九)これらは皆、イスラエルに対する神の選びの事実を明に示しているのである。これら神の選びが考えられる時に、選びの根拠となるものは全く神の主権的な恵みのみ基いているのであって、選ぶ神と選ばれる民との間に相互的な関係はな

い。「あなたがたはよろずの民のうちもつとも数の少ないものである」と「又「虫にひとしいヤコブ・イスラエルの人々」であったのだけれども、神は自からの恵みの行為によって彼等を選び出して、おの「室の民」とされたのである。このように、選ぶ根拠は神の恵みに基づくとともに選びの目的は二つの点にあった。第一には彼等は選ばれた群であったことである。神と個人との関係を最も強く主張したと思われるエゼキエルは「人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である」と言い、エレミヤも「かれらが小より大に至るまで皆

わたしを知るようになるからである」と言っている。(コゼキエニ書三七ノ一一、エレミヤ書三一ノ三四)このように選ばれる者は群としてのイスラエルであった単なる個人ではない。第二の点は選ばれた民は使命を負う群であることを明に示している。彼等は神の真実を明にする証人として選ばれたのである。「あなたがたはわが証人、わたしが選んだわがしもべである」(イザヤ書四三ノ一)「選ばれる者は世に対して神を伝える使命を委託されるために選ばれたのである。以上の二点が選びの目的として含まれている。

新約聖書において神の選びはまずイエス・キリストの選びとして述べられる。「すると雲の中から声があつた。これはわたしの子、わたしの選んだ者である」(ルカ九、三五)。かく神はイエス・キリストを選ぶことによって、キリストを信じ彼に属する者をおの「民」として選ばれた。こゝに教会の選びがある。教会の選びが取り上げられる時、個人の選びが無視されるのでなくて、むしろ個人が、その中に選び加えられ、連なる者として一層確実なものとする。新約聖書において教会は「神のイスラエル」として選びを受け、神の永遠の経綸にあずかる者とされているのである。それでは地上に神の民としての教会があることは何を意味し、何を目的としているのだろうか。教会がおかれていた意図はイエス・キリストの証のために、たゞそのためにだけおかれていたものである。このキリストの教会が地上に教会として存在している姿を私たちが神との交わりとしての礼拝と

祈禱会並びに福音の伝道の三つにおいて見たいのである。

礼拝について考えた。今日世界の教会が礼拝秩序について反省しつゝ、あることは良く知られてい

る。礼拝とは何なのか。やがて来る天国のその予行演習の様なものだろうか。それだけではない。イエス・キリストの恵みの業が行われる場こそ礼拝である。しかも終末の時まで私たちが主イエスの御名によって呼ばれ、赦され、保持され確かめられる出来事が礼拝である。礼拝の貧困の根本原因はこの理解が欠けているためだと思ふ。聖書朗読と説教は御言に聞くことであり、讃美歌、祈禱、献金はこれに対して私たちが身を持ってする告白であり

心答である。礼拝順序の始めから終りまでが聖なる出会いであるとするれば、礼拝に遅刻する問題など立ちどころに解決するのではない。礼拝における献金が生活をたずさえた一人／＼が主の招きに対してする感謝の心答であることを自覚すれば自分の家庭の収支はそうでないのに、教会の収支が赤字になるようなことはなくなるであろう。又信仰と実際、教会と社会

と言った信仰者誰もが苦しむ問題を解決する根本的な姿勢は決定されるのであるまいか。創立後年月を経た教会の悩みの一つは毎聖日必ず礼拝を取り上げることは止めた会員が少なくないことである。この大会の第五分科会(大都市伝道)が課題として「礼拝一〇〇

名位の教会の成長が止るのは何故か」について問うている。若し聖なる神が主においてわたしたちに出会い給うことが礼拝であると理解され、召しと赦しと約束のと確

かめられるならば教会のこれらの問題は解決されるし、又その理解が成立したればこれらは他の方法では決して解決されないであろう。

祈禱会の問題にうつりたい。祈禱会はまずキリストの教会の祈禱会であつて家庭の祈禱や、個人の密室の祈禱ではなく主の民が教会の集りの中でともに祈るのである。祈禱会は初めから不利な条件を負わされている。週間の日、しかも多くは夜である。けれども祈禱会は単に礼拝から礼拝までの息切れを防ぐだけの意味以上のもの即ち礼拝と異なる性質を持っていること。家庭や個人の祈禱とも異うけれども家庭や個人の祈禱を生かし与えるものである。現実の教会の祈禱会には偏りがある。牧師の家族と長老執事の一族によって守られてい

るもの又は牧師の家族と青年等によって守られるなど、こんな状態が一日も早く訂正されて全教会的な公同の祈禱会が回復される必要がある。これに未信者が入って来て「まことに神があな

の保証する真実に基づき、三、従順な者(教会)と不従順な(同九・一)者(イスラエル)とを断ち得ぬ連滞感、などの点である。これによって、不従順の子らのも

き人の神でもあることを信じながら伝道の使命に立つことが出来ると思う。もつ／＼福音信仰には科学や芸術その他の文化受容にはない特別な困難がある。科学には固

境がない然し信仰には大きな壁がある。和魂漢才、和魂漢才と言つて諸文化を容易に受け入れた日本人にとつても、福音の前に立つ時

実に「和魂」の悔改めが求められるのであつてこのつまずきは大きい。教会の無力や伝道精神の貧困とは別なものである。然しこのつまずきの福音こそ日本人を審きま

た赦す唯一の和解の福音なのだから、勝利の主の守りを信じて進むべきである。

教会が伝道の使命を負う時多くの困難と誘惑に直面することを覚悟しなくてはならない。福音の独一性を信じて疑わず、御言の主と

聖霊の導きによる信頼したい。福音の土着化が大いに主張される中で嘗て日本の基督教が陥つた安易な道にも走つてはならない。国家と妥協した仏教の一派は決して日本大衆を救う能刀はなかつた。正しい聖書理解……無教会主義のそれ

でなく――の上に立ち心から聖霊の能力にみちた導き――所謂聖霊主義でなく――日本におけるキリストの教会が今日の時代にも明日の時代に建てられ進められるために協力して祈り仕えたい。「わたしたちがキリストにあずかる者

とされたからには、わたしたちが義とされるだけでなく、それ自身には無にも等しい行いもまた義と見なされるであろう」

# 協議会 総合討議

## 一分科会の報告を中心にして

本教会)

総合協議会は、信徒大会最終の日、四月三〇日午後四時より六時まで、茅ヶ崎小和田教会の蓮見和男牧師の司会によって開かれた。参加者は五〇〇名余、壇上には司会者を中心に二名の各分科会司会者が着席し、会は先ずこれ等一名による代表討議をもって始められた。この様な方式は、我教会としては今大会において、はじめて採用したのであるが、それは実に二日間わたる諸協議の成果の発表であり、またしめく、りでもあり、参加者一同が大変な期待をかけて臨んだ二時間であった。

さて討議は、各分科会司会者の報告と、それに基づく意見の発表で口火が切られたのであるが、その大要は次の如くであった。

**第一分団―集会(礼拝・祈禱)**

① 日本基督教会の前進のために第一に必要すべきことは礼拝の充実である。ここに改めて、礼拝第一主義を提唱する。

② 礼拝第一主義確立のためには自分一人の自覚のみならず全教会員に対する兄弟としての責任をもって、礼拝厳守と礼拝生活をすゝめ合い、またその実現のために具体的な準備と配慮を行うべきだ。

③ 礼拝と並んで祈禱会の重要性をもっと自覚し、一部少数者に固定化された祈禱会の現状を打破し、盛んな祈りの群を形成しなければならぬ。そのために、祈禱会の神学が必要である。

**第二分団―小会―今村武雄(柏木教会)**

① よき小会を組織するためにはよき長老を選挙することである。このことを全教会にもっと自覚徹底さすべきだ。

② 小会運営は、単なる事務に止まらず、牧会的でなければならぬ。そのためには、長老の神学的訓練と自覚が必要である。

③ 此の世の勢力の強大な時代に對して、世俗に巻き込まれぬため、教会から決して離れないことが最も大切である。小会はそのために配慮し努力すべきである。

④ 大・中会の財政に強い関心と責任を小会はもたなければならぬ。また各中会で教職の福祉問題を考へてはどうであろうか。

⑤ 教会の会計に關し、今までに見られる様な予算の組み方ではないけない。即ち、消極的な収入の予想を基として、それに支出を合せる様なことでは伝道の進展はない。もっと献げる精神を第一に会計を考へるべきである。また献金の仕方についても深く反省すべきである。

**第三分団―交わり(壮年会)**

清水正之(大久保伝道教会)

① 壮年の年代は、政治的、社会的、経済的に激斗の年代である。またそれだけに対社会及び其他の責任も重い年代である。そして、この年代こそ最も強力な教会の指導と、また各人の真面目な教会生活が必要である。中会修養会などで強力に、この年代に対する指導訓練にあたるべきである。今更云うまでもないが、教会での中堅ともいべき壮年會が、深い理解と責任をもってその運営に奉仕すべきだ。

② 職業と信仰、また職場における伝道について討議したい。

**第四分団―婦人―勝村浦子(西宮中央教会)**

① 説教、聖書研究のむつかしさについて声を聞くが、語る者のみならず、聞く者も大いに反省すべき一面がある。

② 婦人も、神学的な訓練と、信仰教理の理解を身につけておくべきである。

③ 家庭婦人としての婦人會對する奉仕の目標、家族伝道、また職業婦人としての教会生活の問題、或は夫が未信者である場合の諸問題について討議したいが、具体的な個々の事例については、各教会婦人會で取上げてほしい。

**第五分団―求道―西橋直行(高槻教会)**

① 先ず第一に、説教を真に聞きまたそこに生きていくかを深く反省したい。求道は結局、御言を聞くことにはじまるからである。

② 現代の教会には、無気力な、名ばかりの信者が多い様だが

我々の教会は無気力な信者を造ってはならない。

③ 我々は、求道者を真に愛し、彼等への配慮を忘れてはならない。

**第六分団―大都市における伝道―宮崎善夫(札幌北一条教会)**

① 大都市における交通事情、職場の寒熱、また隣人と疎遠な社会生活等、教会に當って困難な環境を、充分分析し、理解すべきである。

② その他会堂建設に當っては、土地入手困難な事情もあるが大都市の独立教会はもっと開拓伝道への志を燃やし、子を産み育てる如く教会を増し加えて行きたいものである。そのために小会或は中会の指導のもとに組織的な家庭集會等を行ってはどうであろうか。

**第七分団―地方における伝道―高杉喜一郎(函館教会)**

地方伝道は困難であるとの先入感一般に強い様だが、むしろ、地方における地域社会の狭さや、まとまりを利用し、積極的且有効な伝道をなすべきである。

**第八分団―開拓伝道―長島隆夫(豊中伝道教会)**

① 一般に開拓伝道に対する関心が薄い様だ。この分団の出席者は一〇〇〇名の参加者の中わずか三八名にすぎなかった

いものである。

**第一〇分団―青少年の伝道―保田正義(神戸布引教会)**

① 各教会の報告によると、青少年の伝道のために、訪問、隣保組織等々、種々な努力がなされてきたが、もっと中会的な交わりを密にし、また全国的な青年の集いを希望する声が強かった。

② しかし中心的には、礼拝・祈禱会に出席し、そこで交わりを深めてゆくべきである。

③ 青少年の中から、伝道者への召命を受ける者が多く出てほしい。



本教団協議会

**第九分団―個人伝道―小出久子(住吉教会)**

① 個人伝道は、未信者に対し、或は信者に対してなされるべきであるが、種々な方法が考えられ、且実行されている。即ち、二人組伝道、伝道委員会の活動、訪問委員、印刷物配布等々、チャンスを探り出す、めることが大切である。

② 訪問に當っては、自分を語ることを止め、むしろ相手の語ることによく耳を傾け、正しく福音を語るべきだ。

③ しかし忘れてはならないことは、個人伝道は教会的に行われなければならないというこゝとつまり教会形成に役立つものでなければならぬということである。その指導を福音時報等を通してしてもらいたい。

以上各分科会司会者の報告並に代表討議の後、会衆一般もこの討議に参加したが、結論として、礼拝が真の意味で重んぜられ充実せられ、礼拝を土台としたクリスチャン・ライフが実現せられ、祈りと伝道が威力を以てなされ、世俗に對して敢然と挑戦し、この國に真実なキリストの教会を形成してゆこうという我日本基督教会の方針が確認された。そのために何をなすべきか。具体的な方策はまだ討論し尽されなかったが、これらはやがて大会、中会、そして各教会において受けつがれ、更に練られ、実行され、日本基督教会の前進のために資することであろう。

(R・H生)

見聞記

信徒大会見聞記

—前進する日本基督教会—

—祈り、仕え、献げよ—

第一日(四月二十九日)

開会礼拝

二カ年にわたる祈りと準備をもつて、僅か二日間行われた信徒大会は、アカシヤの花香る丘、大阪女学院に於て開催された。心配していた天候も、寒むからず暑からずの絶好のコンディションに恵まれて、前日の四月二十八日には、最早二〇〇名ばかりの遠地よりの宿泊があった。集会場に用いられた、ヘール、チャペルは初代宣教師、日本に子女の教育施設の創し、このことをアメリカの信徒に訴えたところ、ウイリヤム、サンダーと夫人のアーミナの二人で二〇ドル送ってこられ、それが基礎となつてこの学校が建てられたのであり、この夫婦の上の名前を合わせて、かつてはウイルミナ女学院と呼ばれた学校である。アメリカの長老教会によって建てられた本年創立八十周年を迎える学校である。このチャペルはハモンド、オーガンを備え、音響もよく、集会のために丁度手頃な、一、二〇〇名位収容出来る会場である。

出席者を登録の上から少し分析してみると、北海道六三名、二〇教会、不参加教会九、東京、一三教会、不参加教会二四、不参加教会八、近畿、六〇四名、教会数三四、全教会出席、九州、七二名、一教会、不参加教会二。翌三〇日新参加者四三名、合計八七四名(内男二九四、女四九八)教職の出席八三名(内女九名)登録されていない奉仕者約四〇名、その他登録洩れ一〇〇名余とみられている。他教派から三名。陪餐者は約九〇〇名とみられている。

長により、中会の近況報告後、門屋、山本長老、今村好太郎牧師等のスピーチがあり、何だか彼等の取り扱ひの感じがした。

発題的協議会

世戸長老司会の下に「前進する日本基督教会の課題」の主題の下に、初めに、豊田ミヤ(宇都宮伝道教会委員)奥茂喜一郎(札幌北一条教会長老)小樽堅二郎(神戸湊西教会青年)野木源次郎(布引教会牧師)の発題による、パネルディスカッション。発題の主旨は豊田師「独立教会は一つ以上の伝道所を持つように。信徒がもっと伝道のため牧師と協力することを強調」奥茂長老「具体的問題として、神学校献身者への祈り、教職福祉厚生の問題」信徒の求道者への教育的責任。異教に対する戦いの目標を持って」と訴えらる。

小樽見「マイノリティ(少数)としての使命の重大さから二つの面を強調。日基内部の問題と異教社会。日基の教会性の特色を明確にするよう信徒を訓練せよ。地域の社会に於て悩める者を教会に連れ帰るべく、職場における交り有效果的に生かせ」と迫る。

野木牧師は「教職の訓練。礼拝の確立。中会の堅立。信徒の伝道の四点を強調」これらの発題は午後から翌日に引き続き行われた分科会に持ちこまれた。

分科会

分科会は、一分団に問題別に分れた。最初の一日だけの出席のために、壮、婦、青年の三分団が新しくつくられた。

この分科会は、バズ、セッションと呼ばれる、全員思考法がとられ、参加者全員が発言したのはよかった。ただここに残された問題は、多くの悩みや問題、こうすればよいという多くの方法論が提出されたのであるが、それがどのようになっているかというエネルギーの問題になってくると、未解決なのである。伝道しなければならぬことは知っているのであるが、伝道とならない原因が追究されなくてはならない。「伝道のあり方」を知ったのであるが――。

主題講演

「時代における日本基督教会の使命」(前掲)と題する、藤田牧師による主題講演がなされた。夕食後、六時半からの主題講演もプログラム編成からすると変わっている。夜で婦人達の帰る者も多く出るかと思つたが、六〇〇名の会衆であった。礼拝、祈禱会の重大性が印象深く残った。又これが教会を前進せしめるものである。

第二日(三〇日)

祈禱会

午前八時三〇分より、園田牧師の司会奨励により、マタイ四ノ一のイエスの荒野の誘惑から、今日われらがこの三つの誘惑に注意すべきことを奨め、全員がこのためによく祈られた。四一〇名の出席で、おくれる者も少く、第二日が減少甚だしいのではないかと思つたが、満堂の感であった。

聖書講演

午前九時半より、竹内牧師により聖書講演あり(前掲)聖書的に選びの恩寵を確かにし、神の恵みと愛に対して、感謝を新たにした。一時より更に分科会、午後一時半より三時迄も分科会。

総合討議

これは発題の要旨が前提されておる如く、実に多岐にわたつて論じられたが短い時間でよくまとめられた。この時の出席者は四八二名であった。出席者の中には何か宣言のようなものを期待していたかも知れないが、無理にしなければよかった。

閉会礼拝

この閉会礼拝は植村牧師が担当する筈であったが健康思いにまかせず欠席され、武田牧師が代り、「前進させる能力」と題してマルコ福音書四ノ二六より、教会の前進は大地と種のように、夜知らぬ間に成長するので、人間の努力によらず、神の恩寵によることを高調。われらはただ神に対する全き信頼と献身あるのみと訴えらる。教名の祈禱をもつて終る。この時の出席者四六六名。

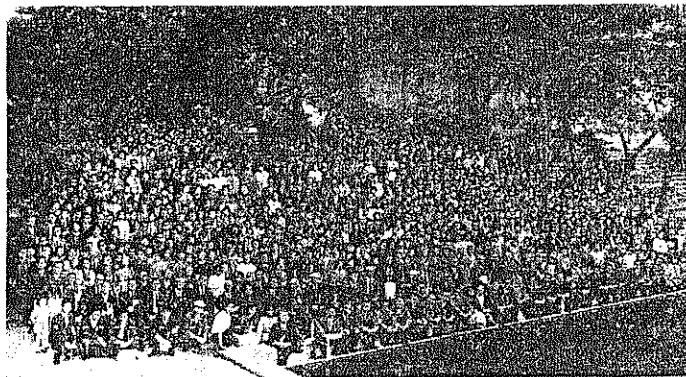
かくして信徒大会は恵みのうちに終幕した。しかし信徒大会の成果は今後にかかっているのである

信徒大会

若林芳樹

ここでもう一度、かの建議案と「信徒大会の性格」を再確認しなければならぬ。それによって個々の教会を強化するとともに、上から下なる教会につらなる信徒一人一人の生きた伝道、奉仕の活動を盛んならしめるものである。――したがって――将来の前進につながる連続した伝道体制の確立をめざすものである。信徒大会は終わった。しかし信徒の伝道活動は新しく初まったのであり、前進が期待されておるのである。(H・K生)

青葉若葉雨にうたなるこの朝信徒大会に出でたんとす  
ふるさとに蜜柑の花の香る日を信徒大会にどれだちて行く  
紀の国のみどり満る山を縫ひ御声聞かむとひたはせて来ぬ  
南より北より集ひ兄弟姉妹(はらから)のわれら天父の声聞かむとす  
天に在ます父の御言葉聞かむとす  
東より西より集ひ言華々  
アカシヤの花白く咲くブルサイド千人の兄弟姉妹(はらから)カマラに向ふ  
いちばつの花咲き切ふ学園に神の教えを仰ぐと集ふ  
水青きブルルのほとりアカシヤの花白くゆれ讃美歌流る  
早朝のチャペル熱帯の声続き間接照明の壁に込み入る  
「前進する日本基督教」の書き文字高くかけて一千人が静まる生活は日毎あたたかだしかすがに礼拝ありて心安けし  
現実の非行少年にふれずして青少年伝道はあらじと思ふ  
淡々と開拓伝道の労苦言ひ長老君の眸静けし  
異教への斗志たぎりてふるひ立つ伝道団の生れよと願ふ



全国信徒大会

出席者の声

印象・恵み・決意

一つの主を仰ぐ

布川 一郎

①印象 「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ。」(エペソ四・五) 北海道からながい汽車の旅でしたが会場に来てみると遠くから来たという感じは少しもなく、皆一つの主を仰ぐ兄弟・姉妹であることを思いました。

②恵み 「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたを選んだのである。」(ヨハネ一五・一六) 神の奇しき選びの内にいられていることを具体的に知らしめられました。

③決意 「あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわさない。」(1コリント六・二〇) われら何をなすべきか。たゞ神の栄光をあらわすのみ。具体的には、神によって与えられた教会に仕えるのみ。人間が教会を造るのではないことを肝に銘じながら。

(苫小牧教会長老)

自己訓練を

西村 歌

未だ相見ざりし同志千余名一堂に会して主を一つ心で讃美し得た事は実に大いなる恵みでありました。又この同志達が主の御用に立つべく熱心に問題を協議討論した事でしたがその何れにも主の導きは豊かでありました。そして創られし者等が創造主の御心に添いまつる者となる為に先に選ばれた

私達が、今なされねばならぬ業について深く考えさせられました。即ち先づ自らの救いの感謝と主を告白しつゝ、生活を明確にする事、怠りを退けて凡ての時を有効に伝道に用いる事、時局を見るに賢くして主の御言を語るに適切で且つ豊かである様に自己を訓練する事、これを教会と共に祈りを持ち決意を新しく、歩調を揃えて歩み度く、折って居ります。

(北一条教会長老)

一つの枝に連なる喜び

大谷 ぶじ

年余に亘り只管此日の為に献けられた祈は遂に聞かれて、森厳な会場には千余名の同信の友が肅然と佇を正して召し出され、齊しく全智全能の御手を感じてひれ伏し罪の赦と限り御慈みの祝福を受けた。会衆は互に未知であり乍ら一つ枝に連なる喜びに勇みつゝ、教職を通して語り且つ迫り給う神に感き怖れて、只悔悟して己の無力を歎き主の御導きを祈るのであった。全国の総力を挙げて実現された今回の壮挙は実に我が日本基督教会の前進を決定的にしたものといつてよい。我々は凡ゆる努力を惜まず奉仕して御旨に添ひ奉るべきである。大阪女学院の校庭に揺ぐアカシヤの白い花房を永久に懐の裏に秘めて、尽せぬ感謝を諸教職、近畿諸教会に献げたい。

(大森教会長老)

福音にふさわしく

宮沢 望

分科会(壮年)で、日基は神学に偏りすぎる、という批判がしきりになされました。他方、職場でさまざまな社会問題に直面する仕年に対しては、これに正しく対処するために神学的な訓練が必要だという意見もありました。

この二つのことは矛盾することではないでしょう。神学とは、何々神学を丸のみすることではなく、今日の時代の中で、いかに福音にふさわしく生きていくか、を指ししめすものです。このことは労働運動や平和運動にたずさわっている信仰者も一人です。がーにとつてとりわけ重要なこと

ともあれ、大会の大きな成果を前進へのエネルギーと化することは、参加した者に負わされた責任であると思ひます。

(浦和教会長老)

日基の固有性を

鮮明に

野木 虔一

「他のキリスト者が、身をもって一緒にいることは、信仰者にとって、類いもない喜びであり、力の源である。」この大会は日基の主にある交わりの一致、主を信じて生きんとする連帯感を強く与えてくれた。信仰者の生活の根源を「礼拝」と「祈り」にあるとし、教会形成を第一とすることこそ、日基の特色であると学んだ。これは大きな恵みであり、感謝である。しかし、日基の前進にとって、も

つと教会の内の形成から、教会の外を攻める伝道についての神学的裏づけと論議が積極的になされる

信徒の

教会形成的訓練

山本 清

▼重厚で行届いた主題講演、信仰溢るる礼拝説教等充実した時間だった。が、討議や分科会では周到な準備にも不拘問題の捉え方が不適確に流れがちだった。例えば礼拝第一主義、今更声を大にして叫ばねばならぬ程礼拝が軽んじられて来たのかと恥しい。かかる××主義は教会を前進させる力とならぬ。寧ろ神が我々をも選びとり給う礼拝が現実には生起するかどうかということになるかが考えらるべき。

▼それ故前進する日基の方向は教会形成へと整えられてゆく事の中に見出し得るのではあるまいか。霊的な面と共に秩序の面、信徒の教会形成的訓練や組織人材を生かす知恵の必要を痛感した。▼提出された課題や提案が各々の責任の場で具体化される事が望まれる。

(大阪北教会青年)

聖日礼拝を厳守

今井 ぶき

一千余人もの、信仰を同じくする方々と共に、一堂に会し、神を讃美する、力強い声と、熱心な祈りのうちに、キリストの体の肢として、キリストにあつて生き、その喜びを、再確認しました。地方の教会に求道し、育てられ、今日に至りました私は、や、基督教会全体が、一つなる神に召

全国の諸教会の皆球方との、お交りのうちに、同じ喜びとそして、悩みのあることなどを、知り得てその解決にむかって話し合いのなされたこと。

いよ／＼聖日礼拝を厳守し、神に栄光を帰し、神の召命に、こたえて、忠実に教会への奉仕の生活をなしていきたく思ひます。

(大垣教会婦人)

恵みの収穫を

児玉 篤尚

準備と祈りのうちに行われた信徒大会に出席し、千余名の兄弟姉妹と共に一堂に会して、一つの幹につらなるものとしての実感を新たにし、また、われわれはあくまでも、礼拝を重んじるものであることが再確認されと共に、討議を通して各教会の持つ様々な問題を解決する方向が与えられたことなど多くの恵みを受けた。たゞ討議の方法は司会者も参加者も不馴れる者が多く、一部には不満を感じた。全員が討議に参加すると云う長所が充分に生かされるように研究と訓練が必要であろう。

今後われわれは、与えられた恵みの収穫を更に自己の教会において掘り下げ、具体化して、日本基督教会の前進に資したいと思う。

(岐阜教会長老)

一つの教会

高石 千恵子

前進する日本基督教会「祈り・献げ・仕えよ」の主題のもとに、開かれた初の信徒大会に出席できたことを、この上もなく嬉しく思ひ感謝しています。私達は様々な場所に散らされていますが、日本基督教会全体が、一つなる神に召

された一つの教会であることを、知識としてではなく、身体をもって感じることができました。「私達は何故に神の選びをうけたのか」との問いに対して何ら答えを持ち合せない私にとって、今はただ十字架によって示された、一方的な神の愛と祝福に真実に答えたいと思ひます。そしてキリストが最も愛し給うた幼い魂への献身を、新たにされている私です。

(下関伝道教会委員)

中会全体で

幸島 宣美

今度の大会で第一に感じた事はそれが充分な準備の下に行われたという事である。会場の選定を初めとして、礼拝、協議、食事等、千名を越える参加者の一員として先ず担当された委員の方々の奉仕に感謝を申し上げたい。

そして各分団の協議も出席者全員が各々周到な用意と心構えをもって臨んでいる事を心強く感じた。活発な討論によって各分団を通じて期せずして一致したのは最も基本的な教会の礼拝及び祈禱会を守ることであった。教会がより前進する為には、之より出で之に帰する事を改めて痛感させられた。そして課題を個々の教会に止らせず各中会全体でとりあげて解決して行くという線が早速九州中会で実現したのは真に喜ばしい。

(大分中央教会長老)

偶感

新緑 正 覆三山 野 候  
鶴首 待望 信徒 集  
感受 恩寵 一言 語 絶  
終生 以捧 神 讚美  
昭和三十九年四月廿九日  
(於大阪女学院)

池上 ユタカ